

BMB2010

第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会合同大会 男女共同参画ランチョンワークショップ

日時：2010年12月7日（火）11：45～13：45

会場：神戸ポートピアホテル 本館地下1階・偕楽3

司会：大阪大学 BMB2010男女共同参画WG座長 篠原彰氏

第1部 イン트로ダクション（講演）

「日本分子生物学会・日本生化学会における男女共同参画の現状」

講師 東北大学・日本分子生物学会男女共同参画委員長 杉本亜砂子氏

○司会 それでは、一番最初に、日本分子生物学会男女共同参画委員長の杉本亜砂子さんからお話があります。杉本さん、よろしくお願いします。

○杉本亜砂子 皆さん、こんにちは。日本分子生物学会男女共同参画委員会委員長の杉本です。今日は、このランチョンワークショップにお集まりいただき、ありがとうございます。ありがとうございました。

今日のタイトルは、このように「男性の視点から見た男女共同参画」です。後ほど非常に興味深い、今年の流行語大賞のトップテンにも入りました「イクメン」のお話が伺えると思いますが、そちらに入ります前に、まず「日本分子生物学会・日本生化学会における男女共同参画の現状」ということで、簡単にお話しさせていただきます。

今年のBMB2010は、日本分子生物学会と日本生化学会の合同の年会でして、日本分子生物学会の男女共同参画委員会と、日本生化学会の男女共同参画推進委員会の合同で企画をしました。

まず、日本の女性研究者比率がどうなっているか申し上げますと、科学技術系の女性研究者の比率は、アメリカ34%、イギリス26%、ドイツ19.2%に対して、日本は13%で、34カ国中最下位という低い数字になっています。

その中でも生物系の学会は比較的健闘しているほうで、日本分子生物学会と日本生化学会の女性会員比率は、スライドに示したとおりで、どちらの学会も傾向は比較的似ています。分子生物学会では24.4%、生化学会では20.8%と、4分の1から5分の1が女性会員ということですので、科学技術系の学会としては比較的多くなっています。さらに、若い世代の学生の女性比率は3割以上で比較的高くなっていますので、女子学生たちが今後も学会に残っていけば比率は徐々に上がっていくこととなります。

一般会員の女性比率は20%程度となっていますが、問題は理事とか役員の女性比率がまだ5%程度という非常に低い数字になっていることで、意思決定にかかわるポジショ

ンにいる女性はまだ少数です。

さらに、分子生物学会では、昨年から年会の演題発表者の女性比率の調査を始めております。この調査は、学会の一番重要な行事である年会でどのぐらい女性が活躍しているかわかるということで見たのですが、今年的一般演題を見ると、女性の演題発表者の比率は28.8%で、学会に所属している女性の比率とほとんど同等です。しかし、残念ながら、シンポジウム、あるいはワークショップのスピーカーになりますと、一気に下がって10%を切ってしまいます。さらに、ワークショップ、シンポジウムのオーガナイザーで見ると、女性は5%程度しかいないということですので、今後は、この年会という研究発表の場において、女性研究者たちが、一般演題だけではなく、スピーカー、オーガナイザーとしても、自らも積極的に手を挙げて参加していければと思っております。

先ほどの比率を見ますと、「スピーカーやオーガナイザーは年齢が上なので女性比率が少ないのではないか」と思う方もいるかもしれませんが、年齢別の比率を見ますと、こちらが一般演題の発表者数で、グレーが男性、水色が女性ですが、各年代で女性は大体20%います。若いほうが多いですが、50代、60代でも女性は20%います。しかし、ワークショップ、シンポジウムのスピーカーになりますと、スピーカーのピークは大体40代ですが、女性の数はどの年代においても非常に少ない。若いほうはかなり頑張っていますが、30代以降では一般演題の女性比率に比べると、スピーカーの女性比率は非常に少ないということになっています。

どの学会でもそういう傾向が見られるかということ、実はそうではないということが、今年、他学会でも同様の調査が行われた結果わかってきました。分子生物学会では、会員全体の女性比率に比べてスピーカーやオーガナイザーが非常に少ないのですが、例えば日本遺伝学会、園芸学会、日本植物学会、日本植物生理学会などでは、会員の女性比率と、シンポジウム発表者、オーガナイザーの比率はほぼ同数までいっている。こういうことがちゃんとできている学会もあるにもかかわらず、分子生物学会はその点は非常に遅れているというか、まだ改善の余地があるということが、最近の他学会の調査などにおいてもわかってきました。これが今日ご紹介したかったデータです。

では、これからは本来の「男性の視点から見た男女共同参画」ということで、次のトークに移らせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 杉本さん、ありがとうございました。今の杉本先生のお話から、これから日本分子生物学会がどのように意識を変えていかなければいけないかというのが、よくわかったと思います。その中で、やはり男性の意識改革が非常に重要だということは皆さんもわかっていることだと思います。

今回のワークショップのテーマは、「今後科学を進めていくうえで、男性がどのようにして家庭や家族とうまく付き合っていくかを考えていきたい」ということで企画しました。

男性の研究者のお話を聞くというのも一つだと思いましたが、今、世の中の流れはどのようなふうになっているかを知ることが非常に重要だと考えて、男性の育児参加、あるいは家事の参加に積極的にかかわっている非常に著名な方の講演を聞くのが、われわれの一つの意識改革のきっかけになるのではないかとということで、今回の講演をお願いすることになりました。

今回の講演は、皆さんのお手元に既に資料があると思いますが、NPO法人ファザーリング・ジャパンの安藤哲也さんをお願いしています。安藤哲也さんは、多分「イクメン」という言葉をつくられたというか、はやらせた方で、この分野で非常に積極的にいろいろ活躍されています。今回は安藤さんの活動や、その中からわれわれが何を学ばなければいけないかということをお話しいただけると聞いています。

講演者の紹介はご自身がしてくださるということで、早速、安藤さんに講演をお願いしたいと思います。安藤さん、よろしくお祈りします。

第2部 講演

「父親の育児参画が生み出す家族的・社会的効果について ～ファザーリングのすすめ～」

講師 NPO法人ファザーリング・ジャパン 安藤哲也氏

○安藤哲也 皆さん、こんにちは。NPO法人ファザーリング・ジャパンの安藤です。今日は東京から来ました。こういった学術的な場に呼んでもらうのは非常に珍しくて、普段は自治体の子育て支援とか、男女共同参画、あとは企業のワーク・ライフ・バランスとか、そういったところでよく呼ばれます。

こういった場にふさわしいかどうかと思いましたが、先ほどの杉本先生の「この学会は女性の活躍がまだ足りない」というプレゼンを聞いていて、これは一般社会と多分パラレルだろうなと思いました。重要な仕事は、まだまだ男性がある程度シェアしていて、女性は、例えば子育てが始まるとそちらに偏ってしまうということが、この業界でもあるのだなということがわかりました。

今日は、私がやっている父親支援という事業、お父さんの子育てを応援している最前線で今何が起きているのか、お話ししたいと思います。「イクメン」という人たちは確実に増えてはいますが、そうは言っても、彼らが抱えている課題や悩みがあつて、それをどうやってみんなで応援して、日本が男とか女とか関係なくそれぞれの能力を生かせる社会になっていけるかというヒントを、何か持ち帰っていただければと思います。

「FJ代表・安藤プロフィール」（講演資料 P2）

では、早速始めます。まず簡単に自己紹介をさせてください。年齢は、僕はこう見えてけっこう年齢がいついまして、今年で48歳になりました。普通この年代だと、家庭

においては子どもが大学生とか高校生ぐらいが多いのですが、僕はまだ小さい子どもが3人います。13歳（中1）、10歳（小4）、2歳で、現役のお父さんです。家族は、あと妻が1人、たいてい妻は1人ですが（笑い）、大手保険会社に勤務する妻がいます。家族5人で東京の文京区というところ、東洋大学の真ん前に住んでいます。

地域にというか、周りにお祖母ちゃんとかお祖父ちゃんはいません。僕の両親は板橋区に住んでいますが、父親は要介護で82歳、母親が毎日献身的に介護をしてくれています。妻の実家は富山県高岡市で500キロ離れていますから、うちの子は3人とも0歳から保育園でした。親に頼むわけにはいかないので、夫婦で力を合わせて、あるいは地域の人たちと支え合いながらやってきましたし、これからもやっていくのだろうと思っています。

仕事は今NPOの代表をやっていますが、僕は85年に明治大学を出て、22年間はサラリーマンをやっていました。9回ほど転職をしています。全く皆さんと生き方が違うような感じです。出版社にいたり、自分で書店を経営したり、IT系企業で、NTTDoCoMo本社、楽天の本社にも最後は4年ぐらいいました。そこで管理職もやっていましたし、サラリーマンとしての生き方というか、育児へのかかわり方というのも身をもって体験しました。そういった辺りを今この活動に生かしているということです。

東京の文京区の地域で、子どもの通う保育園や学童の保護者会長、あるいは小学校のPTA会長をサラリーマン時代にずっとやってきました。

右上に写真がありますが、絵本の読み聞かせのボランティアを7年間ずっとやってまして、仕事で出会ったパパたちと「パパ's絵本プロジェクト」というお父さんの絵本の読み聞かせのチームをつくって、計7年間、全国で活動しています。

あとはラジオに出たり、本を書いたり、絵本の翻訳をしたり、あるいは国のいろいろな委員をやらせていただいています。いろいろテーマはありますが、すべてにおいて男性の育児参画の重要性、必要性を説いているということになります。

「特定非営利法人ファザーリング・ジャパン（FJ）概要」（講演資料 P3）

NPOファザーリング・ジャパンは2006年に日本で初めて生まれた、父親支援に特化したNPO法人です。日本の子育て支援は、最近、民主党政権が子ども手当とかを出してきて話題になっていますが、20年ぐらい前からやっているんですね。平成元年に、1.57ショックといって合計特殊出生率が急激に下がった。そこから日本は少子化社会、人口減少社会になるだろうと言われて、国会でも議論が起きて、当時の厚生省はエンゼルプランとか、あるいは保育園を増やそうとか、いろいろなことをやってきました。

ただ、20年たってもなかなか成果が出てない。ご存じのとおり、今、特殊出生率は1.37まで落ち込んでいます。かつて団塊の世代、3年間で800万人ぐらい生まれたときは2.56ありましたが、今はその半分以下で、東京や大阪、都市部に至っては1を切っている状況になってきています。

そういう中で日本はだんだん活力が失われていく、これではいかんということで、ヨーロッパがやった男女の平等とか、格差の是正——民間はまだ男女の賃金格差がありますから、こういったことを改めるようなことをやって、それをすることによって男性も育児にかかわれるような社会になっていく、それがひいては女性の活躍にもつながっていく、ということを標榜しています。

人は、別に国のために子どもを産み育てるわけではないですから、われわれとしては、「ファザーリング」という新しい言葉、概念をつくって活動をしています。イコール、「父親であることを楽しもう。笑っているパパになろう。そういう笑顔の父親が増えれば日本が変わっていくのではないか」ということをメッセージとして発信しています。

そういう考えを持つ人たちは、若い世代、僕らの分析で言うと30代前半から下、20代の男性たちにおいては、割と普通化しています。でも、僕の世代、40代後半とか、50代、60代の方は、やはり「男は仕事。家長として稼いで、家族を養って、家を建てて、子どもをいい大学に入れる」といった幸せの物差ししか持っていないような状況が多いです。すべての人ではありません。家庭の事情とかによっても違います。

でも、僕の時代、僕より年上の方は思い出してください。中学時代にたしか授業で男性は家庭科がなかったはず。「技術」という、まさに職業訓練を受け、その時間、裏で女子が家庭科室でみそ汁のつくり方やボタンの付け方を習っていました。これを今20代の人に言うとびっくりしますが、学習指導要領に書かれていたことです。うちに帰ってもそのモデルしかいないのです。自分の父親、母親。公務員は別でしたが、当時の民間で勤めていたお父さんはほとんど片働きで、お母さんは専業主婦で家事・育児をやっていたはず。それをずっと見て育っていますから、自分が成長して、結婚して、子どもが生まれたときに、「おやじと同じことをやっていたらいいんだ」と暗（あん）に思ってしまう。

僕らは、パパたちには、「子どもができたならOS（オペレーティング・システム）を入れ替えよう」という言い方をしています。父親OSというものがあって、自分の実のお父さんのものをすうっと安易にインストールしていると、それは古い、30年前にしか通用しない、まるでWindows95のようなOSなわけ。子育てにはいろいろなソフト、アプリケーションが必要です。古いOSでやっているとたちまちフリーズして、子どもとの関係、奥さんとの関係がうまく築けないということで悩むわけです。

固まったパソコンは皆さんどうしていますか。強制終了、あるいは買い換えますよね。これが家庭においては離婚というようなことになるわけです。離婚は、今、日本では年間25万件発生しています。25万件のうち14万件が子育て家庭、18歳未満の子どもがいる家庭です。

こういったことの予防も含めて、やはり男性の意識を変えていくことが必要です。それは決して能力がないわけではなくて、そういったモデルを見ていないからです。あるいは、学校や企業でも、「よき父親たれ」などということをお教えずに済ませません。そうい

ったことをもう少し国や自治体、あるいは企業を通してやっていくという環境づくり。意識改革と、働き方の見直し、ワーク・ライフ・バランスの視点を持つ、企業の意識を変える、地域を変えるということと、環境づくりの両方を僕らの活動でやっています。最初は数人で始めましたが、今は160人ぐらいになっていて、企業も18社が僕らの活動を応援してくれています。

「ファザーリング・ジャパン (FJ) の事業」 (講演資料 P4)

事業一覧はスライドに示したとおりです (「セミナー、ワークショップ、フォーラムの開催」「ファザーリング・スクール (父親学級) の開講」「個人、企業の意識 (実態) 調査」「子育てパパ力検定の主催」「父親コミュニティ、ネットワーク形成」「パパソング音楽配信、Tシャツ (パパT) の販売」「父子旅行 (キャンプ) の開催、パパ保育園の運営 (計画中)」「若年層 (次世代パパ) への早期教育@大学・高校」「企業連携 (研修、事業アライアンス)」「父子家庭支援 (フレンチトースト基金)」「産後うつ予防 (ペンギンパパ・プロジェクト)」「男性の育休取得推進 (さんきゅーパパプロジェクト)」)。こういった講演会、セミナーが主力で、今、年間300回ぐらいになっています。僕が行ってない県はあと4県しかありません。どこかというとなんのほうが多くて、佐賀県、宮崎県、香川県、富山県です。こういうまだまだ「お父さんが育児をするなんて」というような、行政の人でもそういうふうになってしまうところからはなかなか呼ばれませんが、だいぶ意識というか、ファザーリングの波は各地に届いているかなという気はします。

去年は父子家庭支援をやりました。ご存じかどうか、今、日本では父子家庭が20万世帯あります。母子家庭は140万ぐらいあります。父子家庭は年々増えています。父子家庭になってしまう理由は、死別——奥さんが病気や事故で亡くなるケースが2割、あとの8割は離別で、奥さんが子どもを置いて家を出てしまうケースです。うちの会員にも4人、父子家庭のお父さんが入って来て、彼らの実状を聞いて、われわれで何か支援をしていこうということをやってきました。おかげでというか、いろいろ活動をしたり彼らも声を挙げた結果、今年、法律を変えることができました。児童扶養手当法が40年ぶりに改正されまして、今まで母子家庭にしか出てなかった手当が、今年夏から父子家庭にも支給されるということが、5月の国会、衆参両院全会一致で可決、成立しました。今、低所得の父子家庭の数万世帯がその手当を受けています。

ただ、お金だけではないんですね。やはり、就労というか働き方の問題も変えていかなければいけない。日本の企業は今、長時間働ける男性しか要らないというモデルになっています。残業や出張を、指示を出せばすぐにやってくれる、行ってくれる人が基準になってしまっています。母子家庭のお母さんもそうですが、父子家庭のお父さんは小さい子どもがいるから残業ができない、出張で家を空けることができないので、今、非常に困っています。会社を辞めてしまう父子家庭のお父さん、シングルファザーがた

くさんいます。今年もまたそういった支援をやっていくつもりです。

あとは、今年は何児休業法が改正になりましたので、日本も男性が取りやすくなりました。

資料の下二つ（「産後うつ予防（ペンギンパパ・プロジェクト）」「男性の育休取得推進（さんきゅーパパプロジェクト）」）を赤字で書きました。日本はこれまでは里帰り出産が主でした。里帰り出産をやっているのは日本だけです。ヨーロッパなどはやりません。基本的に、産後は一番お父さんと子どもでも愛着形成ができる時期なのに、日本はわざわざ引きはがすことをやっているんですね。なぜかというと、夫があてにならないからです。休めない、帰って来ない、家事ができない、「実家の母がいいわ」となって実家に帰って行く。でも、実家の母も老いていきます。実家では介護が始まったりして、最近は何りたくても帰れない高齢出産の方もいらっしゃいます。結局、子どもは誰かが見なければいけないのですが、母体は産後3週間は安静にしていなければいけませんから、そのときにパパが（産休を）取るということに今回法改正は注目して、そこで（産休を）取っても、もう1回取れるように1回目がノーカウントになるという改正をしました。

われわれとしても、「父親がそういった時期にある程度育児をやっていると、あとあとスムーズになるよ」ということで、産後の育児休業を取る男性たちを応援する「さんきゅーパパプロジェクト」というのをやっています。もし、この中に3月までにお子さんが生まれるような方がいて、組織に属して育休を申請できる方はぜひ取ってください。僕らは今、4週間以上取ったパパに5万円から10万円の経済支援をやっていて、今50人近くのパパが申し込んできています。原資は、基金をつくって寄付を集めて、そこから捻出しています。

「産後うつ予防（ペンギンパパ・プロジェクト）」というのがあります。今年7月に、日本テレビの女性アナウンサーがマンションの屋上から飛び降り自殺をしました。その原因は、実は産後うつという症状だったと言われています。産後うつは、実は今、10人に1人のお母さんがかかっている精神病です。しかし、これについてはまだ知識や情報も少ない。われわれとしては、特に夫、パパがこの知識や相談先などをきちんと理解して、予防あるいは産後うつになってしまったときにどう対応するかということを、日本助産師会とタイアップして、「ペンギンパパ・プロジェクト」というのをやっています。

なぜ「ペンギン」というかということ、コウテイペンギンは4カ月間オスが足元で卵を温めてかえすという生態だからです。だから「産前産後はパパ（男性）ももっとかかわって、知識やネットワークを高めていこうよ」ということをやっています。

それぞれ専用のホームページがありますから、お暇なときにちょっとご覧になってください。産後うつに関しては、ホームページを立ち上げたときに、新聞にもけっこう書いてもらいましたが、「妻が産後うつのようなだけでも、どうしたらいいでしょうか」

というメールが殺到しました。今はそういうパパたちを集めてセミナーなどもやっている最中です。

「ファザーリング・スクール（父親学級）」（講演資料 P5）

スライドは去年始めたファザーリング・スクールという日本初の本格的な父親学校です。さっき言ったように、日本の男性は父親になることを学ぶ場が全くないんですね。女性の皆さんは、子どもを産まれた方は覚えていると思いますが、妊娠すると母子手帳をもらって、保健所、保健センターで検診を受けたり、母親学級というのがあったと思います。女性、お母さんは、お母さんになる前にいろいろ学ぶ機会がいっぱいありますが、実は父親はほとんどないんですね。最近は多くなりましたが、両親学級というのが1回だけあります。最近是有給を取って平日に来るパパが増えています。でも、何を教えてくれるかという、沐浴体験、お風呂の入れ方しか教えてくれない。3kgの人形を使って、「ここで耳を押さえてこうやってやるんですよ。以上。頑張っってね、お父さん」みたいな感じです。

これでは全く育児は回っていきません。育児雑誌の写真の投稿欄を見ていると、みんなお風呂に入れている写真ばかり投稿していますね。つまり、それは教育の結果というか、お風呂さえ入れていれば育児をしていると思っているという状況を生んでいるわけです。

でも、赤ちゃんを育てたことがある方はわかりますが、赤ちゃんというのはお風呂に入れているときよりも出してからが大変ですよ。おむつを替えたり、白湯を飲ませたり、パウダーを付れたり、いろいろなことをやって、そのうちに泣き出す。そういうところも男性はもっと経験したほうがいい。今、ヨーロッパの男性は当たり前のようになっています。

僕らはおむつのつけ方は教えませんが、「パパの育児参加と子どもの成長」、パパがかかるとこんなにいいよ、ということ、うちの理事で神戸常磐大学准教授（幼児教育のプロ）が教えてくれます。あとは「ワーク・ライフ・バランス」。これは企業に勤務していて、今コンサルティングをやっている会員のパパがやってくれます。あと、「絵本の読み方」とか、「手遊び」ですね。これは面白いですよ。スライドの写真は、大阪で仕事帰りのお父さんたちがたこ焼き踊りか何かを習っている姿です。あとは、「産後のケア」として奥さんのマッサージとかも教えますし、「パートナーシップ」は、僕らは「ママケア」と呼んでいます。けっこう悩みが多いので、こういったこともやっています。「ファイナンシャル（子育てとお金の話）」、「育児と社会問題」、「地域・コミュニティづくり」、「PTAのかかわり方」、地域でパパ友の作り方も教えたりします。最後は、毎回「放課後」ということで、ビールを飲みながら交流するネットワーキングは非常に重要です。

このあいだ、NHKのクローズアップ現代でも特集されましたが、こういった男性育

児を学ぶ場というのは、やはり今後求められてくるだろうと思います。これをお父さんになる人がしっかり受けていれば、さっき言ったOSはこの段階で多少は新しくなります。僕は、ここはやはりもっと広めていきたいと思っています。

「FJフォーラム（政策提言へ）」（講演資料 P6）

それから、政策提言（アドボカシー）もやっています。左上の写真は先ほどいった父子家庭支援。左下の写真は男性の育休取得推進。僕が住む文京区の区長さんは3月に（育休を）取られました。このあいだは広島県知事も取ることが話題になっていましたが、今は全国で6人の首長が育休を取る。だんだんこういう流れができています。

右上は、都心部で困っている保育園待機児童問題について、もっと父親も考えようよということでやりました、非常に盛り上がり、その勢いで渋谷でベビーカーデモ行進をやりました。このおかげで、安心子ども基金という財源に1,500億円が上積みされて、今、保育所の不足解消に向かっていきます。

それから、昨今痛ましい事件が多いですが、児童虐待問題はオレンジリボンさんと今やっています。

産後うつはさっき言いましたが、こういった展開もしています。

こういったことは、これまでは女性の問題として語られていました。メディアもそうです。男女共同参画も常に女性の問題、子育ての問題もそうですね。介護もそうです。でも、そうではない。「われわれ父親も保育園に行くし、育休も取るし、虐待に胸を痛めているんだよ。産後うつに対しても関心が高い」ということを示したいとか、発信したいということで僕らはやってきました。

「国・自治体etc連携」（講演資料 P7）

そういったことを、国や自治体、NPOさんなどいろいろな連携して、今、展開しています。東京都、内閣府、厚生労働省、大分とか鳥取も頑張っています。「につぼん子育て応援団」は勝間和代と一緒にやっています。こういった民間の子育て支援は今盛んになってきています。こういった領域で活動しています。

「父親の子育てを支える環境づくり」（講演資料 P8）

4年前に立ち上げた頃はまだリーマンショック前だったので、「男性が子育て？何を言っているの。男は働いて、もっと経済、GDPを上げなければ」とよく言われていましたが、リーマンショック後は、やはりがらっと空気が変わりました。男性の人生の価値観のパラダイムシフトが今起きています。そういう中で「イクメン」という言葉も出てきました。これは僕が考えたのではなくて、博報堂という大手広告代理店が考えた言葉です。今年1月に、前厚生労働大臣が、国会で「今年はイクメン、カジメンを増やしたい」と言ったんですね。翌日、全新聞が「イクメン」を書き、それでブレイクスルーし

ました。今年の流行語大賞にも入りました。言葉はそのうち廃れてきます。来年の今頃は、「イクメン」という言葉は僕はないと思います。社会に定着すればいい。

厚生労働省が一生懸命こういうパパたちを応援しているのは、ひとえに少子化の歯止めです。ヨーロッパの例を見ても、男性の育児参加が増えている国のほうが出生率は伸びています。プラス、それによって女性の就業率を上げていくことが厚生労働省としてのねらいです。だから国は予算をつけてやっていますし、僕も呼ばれて座長になりました。そのイクメンプロジェクトの公式ホームページに、全国から1,000人以上が「イクメン宣言」を書き込んでいますので、お時間があるときにそこだけずうっと読んでみてください。一般のパパたちからの声ですが、あれを読んでいると、「やっぱり日本も変わってきたな」と実感されると思います。僕としては、蓮舫議員に仕分けされないように成果を出して、来年度も続けたいなと思っています。

「イクメン（育児に積極的な男性）が急増！」（講演資料 P9）

メディアもスライドに挙げたような特集を組んでくれますし、雑誌やガイドブックも出てきますし、女性誌でも今、イクメン特集が組まれたりしている状況です。

あとは、子ども手当がお父さんの口座に振り込まれるということもありますが、イクメンマーケットというものができていて、百貨店とうちで、イクメングッズということで、「ベビーキャリア」と言いますが、抱っこひもを作りました。今まではママを想定した、ファンシーな、サイズもちょっと小さいものでしたが、パパに合ったサイズで、カッコいいデザインや素材を使って作りました。今、高島屋で販売していて、ほとんど完売です。カーキ色で丈夫なものをつくったのですが、生産が追いつかない状況になっています。

ベビーカーはパパが買うのは当たり前になってきています。関東などの待機児童が多いエリアでは、子育て支援マンションができていて、マンションの真ん中に保育所があって、その横に小児科があったり、子育て中の親に便利なサービスがいっぱいあったりします。ママたちに聞いたら、「パパの支援もしてほしい。早く帰ってくるような意識改革とか、マンションの中でパパ友をつくるようなやり方を教えてくれ」というニーズがあって、僕らがマンションのパビリオンでスクールをやることももう決定しています。大阪でも今、同じようなものがつくられています。このあいだ第1期販売をしたら、260戸即日完売しました。こういった付加価値が、今、不動産にも求められてきているということです。

「日本でいま注目を浴びるイクメンとは？」（講演資料 P10）

日本で注目を浴びるイクメンですが、皆さんもよく週末、駅や繁華街で小さい子どもを抱っこした男性を見ると思います。僕らは、「週末だけではもったいない」と言っています。あるいは「子どもとだけ向き合うのが育児ではない」ということも言っています。

す。

イクメンに関して、僕らはこういう定義をしています。まず、「イクメンとは、育児・家事を楽しめる男のことである」。義務ではない、お手伝いではない、家族サービスではない。自分で主体的にやって、それを楽しめる域までいこうよ、ということです。なかなかそうはいかないというパパも多いですが、基本的に男性は何でもできるのです。できないのは出産と母乳をあげることだけです。そのほかの育児、家事は実は全部できるのです。それを「できない」とか、「やらなくていい」というのは、親の代からすり込まれているだけの話です。

実際、父子家庭のお父さんたちは1人でやっていますね。あるいは、育児休業を半年、1年と取っている人は、妻がフルタイムで働いて自分1人でやっています。できる人はいるのです。やる必要がない人は別にいいと思います。それで奥さんが納得しているのだったらいいのですが、「やりたいとか、かかわって自分の生活を高めたい人は、楽しむところまでいこうよ」ということです。子どもに対しても同じです。ママが主担当、自分が副担当ではなくて、僕らは「子育てはツートップ・フォワードでいこう」と言っています。

「ツートップ・フォワード」とはサッカーの攻撃的フォーメーションですね。よく南米のチームがやります。日本はサッカーも育児もワントップです。前線でママが孤立化するのは。だから、パスが通らない、点が入らないと、すごくフラストレーションがたまります。だから、2人でひっかけ回して、すきがあれば点を取る。ワールドカップのドイツ対イングランド戦のときのドイツみたいな、ああいう育児をやろうよと僕らは言っています。

パパも、「いや、僕だっただまに出番があります」。「でも、それはフリーキックで、ただ後ろから蹴りにくる人だよ。2回しかないじゃん。それは週末オンリーパパだよ。それだとなかなか点が入らないよ」ということです。ママと同じぐらいに主体的にかかわれば、子どもも、ママと同じぐらいに父親に対して信頼と愛情関係を持ってくれます。

女性の皆さんも誤解していますが、母親だから子どもが懐くのではないです。母性はもちろんあります。男性はおっぱいは出ません。でも、そのほかを全部やっていけば、実は同じぐらいに子どもは懐くのです。つまり、毎日そばにいて、愛情を持って総合的にお世話をしてくれる。子どもは、ご飯をつくってくれたり、着替えさせてくれたり、学校の勉強を見てくれたりする人に懐くだけなのです。

「『男性だから俺は無理』とか、『やっぱりかみさんにはかなわないよな』とかいう言い方はおかしいよ」と僕らは言っています。それはやってないことの言い訳に過ぎないということです。これが母性神話の落とし穴で、女性自身も「母親だから仕事を辞めて家に入らなければ」と思ってしまうことがあるんですね。そこはやっぱり意識を変えてもらいたいですね。

本当のイクメンは、子どもだけではなくパートナー、自分の大事な子どもを命懸けで

産んでくれた奥さんをどれだけトリビュートできるか、ということです。育児を常にメインでやってもらっているのだったら、感謝と心遣いを忘れない。「俺は外で働いているんだからいいんだよ、これで」とか、ひどいパパになると、「いいよな、おまえは家の中に1日いられて」とか言ってしまうパパがいます。なんか自分が戦場へでも行っているような気分になっている。「何を言っちゃってるの」と思います。いいパートナーシップをとって、きちんと奥さんをケアしていると育児にもいいということです。子どもに対してもいいですね。

あとは、これからはやっぱり地域の時代と言われています。地域や社会のあり方にも意識を向ける。つまり、自分の子どもの通う中学の学区のエリアぐらいが子どもにとって安心・安全な地域になっているか。そこにパパがもっと入って行って、斜めの関係を築いていく。僕は東京生まれですが、僕の世代はまだ、父親以外に叱ってくれる近所のおじさんがたくさんいました。皆さんはどうですか。そういう人のことを覚えていませんか。今はそれがいないのです。ほとんど母親しかいません。地域で子どもたちが出会っている大人の男性は、多分学校の先生ぐらいです。学校の先生もぐらぐらしていますから、これではなかなか厳しい。「もっと僕らが出て行って、『地域の子は自分の子だ』ぐらいに思ってやろうよ」。

僕はよく4年生の子どもを「ハリー・ポッター」とか「ポケモン」とか（の映画）に連れて行きますが、必ず地域の男の子たちを誘って行きます。その中には母子家庭の子もいます。バスに乗って騒いだら同じようにしかり飛ばします。でも、一緒に映画を見て、ラーメンを食べて帰れば懐いてくれます。

僕は小学校でも絵本の読み聞かせをしているし、PTA会長もやっていますから、子どもたちはみんな僕のことを知っています。「何かあったら電話しろよ」と、母子家庭の子に僕の携帯の番号も教えています。そういった、ある意味セーフティーなネットを地域でどうやってつくっていかせるか、そのキーパーソンが実はお父さんなんだよということです。「『PTAは母親のものだ』とか言って何もかかわらないのでは、もったいないし、子どもが犯罪に遭う死角をつくってしまうのではないのか」と僕らは言っています。

これが僕らが言っているイクメンの必要十分条件です。これがなくても子どもは育ててしまいます。でも、僕らが言っている「父親を楽しもう」ということは、「こういった意識を持っていると、つまりOSの中にそれを組み込んでおくと、随分風景が変わってくるよ、子どもとの関係もよくなっていくよ」ということです。

「なぜいまイクメンに注目が!？」（講演資料 P11）

なぜイクメンが注目を浴びているか。一言で言って、30年前、40年前、僕らが小少年少女だった時代とはいろいろなことが変わってしまったのです。経済も変わりました。個人の価値観、ライフスタイル、家族のモデルも変わってしまった。「出産、子育てが困難な国」と、今、日本は言われています。結婚すらできない。したくない人は別にい

いですが、したいのにできない人がすごく増えてしまっています。日本は結婚制度が強いし、嫡出子という結婚していない家の子どもは不利益を被るような制度もありますから、そういった部分で子どもの数はなかなか増えない。女性が家に入ってしまうと、労働力が減っていってしまう。せっかく結婚したのに、年間75万件のうち25万、3分の1が破綻しています。そして、毎年10万世帯ぐらい1人親家庭が生み出されています。子どもが生まれても、そのあと、育児ノイローゼ（産後うつ）、虐待、教育問題と、延々と続くわけです。家族モデルの多様化、地域社会の機能不全、母親が1人で追い込まれていくというふうな状況になっています。

縮む経済・伸びない所得。必然的に共働き家族が増えるのですが、保育園がない。またお母さんは辞めざるを得ないという状況になってくる。これを、やはり日本もそろそろ本気で変えなければいけない、ということで、今、そういう目的の下にいろいろな活動が行われています。

スライドの「先進諸国における男性の家事時間割合と出生率」のグラフは総務省のデータです。ご覧のとおり、男性が家事をやっている国のほうが出生率が上がっていく傾向にあります。日本は1日30分で、なかなか増えていかない。ドイツは、やっている割には増えない。ドイツも母性神話が強い国です。3歳まではお母さんが家で子どもを見る。旧西ドイツはプロテスタント系キリスト教が強くて保育園は全然つくってこなかった。今、同じ問題に直面しています。見ているとイタリアとスペインもそうです。この辺は昔の同盟国ですね。そういうものなんだなと思いました。

「パパが家事・育児をすると社会的には・・・」（講演資料 P12）

右側の「図表27 女性（30-34歳）の労働力率と出生率の関係：2000年」のグラフはILO（国際労働機関）のデータです。男性が育児をやると女性の労働力が上がります。労働力率と出生率の関係で見ると、女性が仕事を辞めなくてもいい国のほうが伸びていく傾向にあります。アイスランドはご存じのとおり男女共同参画が世界一高い国です。日本は左隅に置き去り状態です。トラックレースだと5周回遅れぐらいになっています。70%の女性が結婚、出産でキャリアを捨ててしまう。再就職もできない仕組みになってしまっています。それでは増えないです。

少子化になるのは、一言で言って、女性が産むことをあきらめたり、ためらったり、先延ばしにしていることの結果です。これはやはり女性たちにもものすごくプレッシャーがかかっているわけです。両立問題、あるいは子育てが今難しいのではないか、自分も虐待してしまうのではないか、あるいは自分の時間も欲しい、あるいは母親のプレッシャー、母親は育児ができて当たり前、しゅうとめからのプレッシャー、すごいですね。そういったものを、先輩を見ていると「私には無理」とか思ってしまう若い女性が多いんですね。

「日本の女性が子どもを産むことへの四大不安」 (講演資料 P13)

僕らの母親たちは、この表の「1位 仕事と育児の両立ができるかどうか」にしろ、「2位 いまの社会環境では安心して子育てできない」にしろ、そんな不安を抱えている人はあまりいませんでしたが、現代はこういった環境の中で日々苦勞して、苦渋している状況になっています。(「3位 自分の時間がなくなってしまう」「4位 母親へのプレッシャー>自分の意識」)でも、この人(イクメン)がいると、これも改善、解決することも増えてくるということです。

「専業ママたちの悩み」 (講演資料 P14)

逆に、仕事を辞めてしまった女性たち、中には辞めざるを得なかった人もいますが、そういう人たちも、最初は赤ちゃんがかわいくてやっているのですが、どうしてもだんだんつまらなくなってくるんですね。これは実際に保健センター、女性センターでやっている母親相談事業に寄せられた声です。「子どものことで、子育てのことで」と言って来るのですが、よくよく話を聞いてみると、実際には、その多くはこういった問題(1位 夫のこと、2位 自分のこと、3位 姑との関係、4位 近所のママ友との関係)です。

夫とのことで悩んでいるというのが全体の40%あります。育児への無関心、帰宅不全、それによる孤立。つらい、苦しい。夫婦の会話もない。ここ1カ月業務連絡みたいな会話しかしていない、みたいな。「今日、ご飯は要るの? 要らないの?」、「週末はいるの? いないの?」、「今日は神戸で学会だからいない。以上」みたいな(笑い)。これではママたちは大変ですよ。子どもはちょろちょろ歩く。病気をしたりいろいろやりますから。浮気とか、お金を入れないとか、暴力、DVとか、ひどいケースがいっぱいあります。韓流スターに流れたり、嵐に夢中になるお母さんが多いですが、わかるなと思います。

2位は自分のことです。今、女性たちは大学に行ったり、キャリアを積んでやっています。それで仕事を辞めてしまうからこれが起きます。日本は、家に入ってしまうと、「〇〇ちゃんママ」、「〇〇の嫁」、「〇〇の奥さん」とかしか呼ばれなくなる。何か仕事を持っていれば自分の名刺があるわけですから別です。自分の名前で自己実現ができますが、いわゆる母親とか嫁とかいうのは非常に中途半端で、ある種、個を殺さないやれないようなところあります。そうするとアイデンティティがおかしくなってきました。

最初はいいいけれども、子どもが病気がちになって眠れなくなると(産後うつが)起き始めます。産後うつは大体生後3カ月目から発症するケースが多いです。最初はかわいいからいいのです。でも、「すごく大変で、思いどおりにならない。寝返りをまだ打たない。おっぱいを飲んでくれない。どうして? 仕事では全部自分の思いどおりにうまくいっていた。それがうまくいかない。マニュアルを見ても、ネットをさまよってもわからない。私は駄目な母親ではないか」と悩んでいる人たちです。

あとは古くからある姑との関係や、最近は近所のママとの関係でも悩んでいたりします。でも、この人（イクメン）がいると、話を聞いてくれるだけで随分楽になることもあります。1位の悩みは、夫が変われば全部解消します。いかがでしょう。

「男性（パパ）の子育ての悩み・課題 ①仕事が忙しくて育児時間がとれない」

ここまではママ、あるいは社会がなぜイクメンを求めているかでしたが、ここからは、イクメンが増えていますが、パパも悩んでいる実態についてです。

どこに行っても愚痴が聞こえます。仕事が忙しくて育児時間が取れない。皆さんの場合は研究だと思いますが、残業や研究時間が長くて、せっかく子どもが産まれても寝顔しか見られない。土日も行かなければいけない。日本の男性の家事・育児時間は、国の統計では1日平均30分ですから、本当にできてない。子育て期の男性の4人1人が週60時間以上の長時間労働。育休取得率にしても、男性は1%。女性は90%取っています。すごく差が開いています。子育てだけでなく、本人の健康問題も挙げています。意識調査をしても、7割の人が育児もやりたいと言っていますが、現実には仕事を優先させざるを得ない。育休も、30%の男性ができることなら取りたいと言っていますが、実際には1%しか取らない。この理想と現実の乖離を何とかしたいというのが僕らの活動です。

「パパ、ママは何時に帰っている？」（講演資料 P16）

スライドのグラフ（平成19年度東京都福祉保険局基礎調査「東京の子どもと家庭」速報）は、東京都の調べで、実際の帰宅時間です。小学生までの子どものいる家庭で、「お父さん、お母さんは何時に帰っているの？ 家にいるの？」と聞きました。女性は、仕事がない人は17時前から家にいますが、仕事がある人でも、定時に終わって、保育園に迎えに行くと、19時にはご飯を食べている人が8割以上です。男性はその頃、半分以上はまだ仕事の真っ最中で、21時以降の帰宅がこのように（46.4%）多いわけです。東京で言うと、新宿、渋谷、品川あたりから出る23時台の下り列車の混み方は異常ですね。

外国人が来て一番びっくりします。このあいだドイツ人が来たときに、「日本にはこんなにドランカーがいるのか」と言いました。「違う、違う。8割は残業組だから」と教えました。「何でだ。彼らには家族がいるのだろうか？」。このあいだ、僕はワーク・ライフ・バランスの学会に呼ばれてベルリンに行って来ましたが、地下鉄に乗ったら、平日の18時過ぎでもがらがらです。ドイツは17時に終わるんですね。フランスは16時に会社が終わります。そのちょっとあとがラッシュアワーで、ほとんどの人はその時間は家でご飯を食べています。だから、保育園のお迎えは、フランスもベルリンも9割がパパです。僕は早くこういう社会にしたいなと思っています。それからまた仕事に戻ったりする人もいるし、あるいはご飯を食べたあとにお父さん同士でパブへ行って、ビールを飲みながらサッカーの話とかをするんですね。これが豊かな暮らしではないのかということです。日本はなかなかそうはいかないパパたちが多いです。

子どもは早く寝てしまいますから、専門家は「8時までにはうちに帰らないと育児はできないよ」と言います。8時に家には何時に職場を出ればいいのか。そのために朝からどのようにして効率よくtodoリストをこなしていけばいいのか。労働生産性を上げながら、効率よく早く仕事を片付けるすべを僕らは専門セミナーでは教えています。メールの書き方も教えます。

「男性労働者の週当たり実労働時間」

スライドのグラフは男性労働者の週当たりの実労働時間です。ILOの調査では、日本は世界一長いです。労働生産性という1人当たりが生み出す労働価値、お金というのは、実は先進国20カ国中19位。下から2番目で、効率の悪い働き方をしています。

「男性労働者の年間労働時間（日本）」（講演資料 P17）

下のグラフは、男性労働者の年間労働時間です。これは一般企業が多いですが、正規は2,000時間で、正規の残業時間・プラス・サービス残業があります。サービス残業とは何でしょう。無給残業ということで、ほとんど奴隷状態ですね。30代の子育て世代は年間400時間も取られてしまっています。この時間を家庭に投資すればどれだけ家族がハッピーになれるか僕らは教えています。

セミナーで、「先週月～金で何回夕飯を家族と食べている？」と僕が聞くと、圧倒的に多いのは0回です。「来週からそれを1回にしようよ」と教えます。いきなり5回は無理だから、「1回ぐらい帰れるんじゃないかな。帰ってみれば、そこには子どもの笑顔があるし、ママとの会話も増えるよ。そうすると風景が変わってくるよ。家庭が安定したほうが君も仕事に集中できるんじゃないの？」。はっきり言って、僕は家庭に問題を抱えている人は、労働生産性が高いとは思いません。実際、僕が楽天やDoCoMoの管理職をやっているとき、中学生の息子が不登校になっているという部下がいました。そのことで学校から呼び出しとかくられてしまって、全く仕事が手につかないときがあるのです。

だから、「ワーク・ライフ・バランスは、技術ではなくて、何のために帰るのか。帰って、自分の子育て（あるいは介護の人もありますが）とか家庭の問題に自分がコミットできる。そこで落ち着く。だから翌朝仕事に出掛けられるんじゃないの？ 子育て期はお父さんの給料や出世じゃないよ。家族といる時間が貴重な資源なんだよ。子育ては期間限定でいつか終わる。会社の仕事の代わりはいても、この子のパパは君しかいないんだよ」と、僕はいつもセミナーで言っています。僕も大企業するとき、子どもが生まれるまでは仕事ばかりしていました。子どもができてOSを入れ替えることができた。今は子どもたちとすごくいい関係が築けています。

「男性（パパ）の子育ての悩み・課題 ②子どもとどう向き合っていかわからない」

子どもとどう向き合っているかわからないという悩みが第2位です。一緒に遊べない。どう接しているかわからない。反抗期、いやいや期でも、しかり方がわからない。情報と愛着がないからです。

このあいだも川崎市でセミナーをやったら、2歳児のパパが、「僕は土日しかできないんです。でも、土曜日は一生懸命やる。妻にも自由な時間をあげたい」と言っていました。でも、公園へ連れて行っても、娘がパパを拒絶するわけです。「ママがいい。ママじゃなきゃ嫌だ。おうちへ帰して、パパ」。公園中に泣き叫ぶ娘の声が響く。近所にもデビューしてないから、「あの人、誘拐犯じゃないの？」と指を指されてしまって、ほうほうの体で逃げ帰るパパ。マンションのドアノブを開けたら、掃除機をかけた奥さんが、「あなた、もう帰って来たの？ まだ10分もたってないじゃないの。私、これが終わったら美容院に行こうと思っていたのに、全く使えないわね、この人は」とか言われている。

それで僕らのセミナーに、「どうすればいいですか」とやって来る。「土日だけではやっぱり無理だよ。平日帰れないのだったら、朝起きてでもいいから、少しでもいいから毎日かかわってごらん。一緒にご飯を食べる、着替えを手伝ってあげる、保育園、幼稚園まで一緒に行く。何でもいいんだよ。ちょっとでもいいから毎日かかわることが大事だ」ということを教えます。

よくスポーツのアスリートたちも言いますね。「練習はうそをつかなかった。毎日基本的なことをこつこつやっているから10年連続200本安打を打てた」。毎日水に入って、一生懸命泳いで距離を延ばした人が、アジア大会で金メダルをとっている。育児も全く同じです。毎日かかわること。犬もそうですね。毎日散歩に連れて行く人に懐きますね。それがお祖父ちゃんだろうが、お母さんだろうが、中学生だろうが。同じです。「だから、週末だけのパパは万年予選落ちだよ」と言っています。

自分でかかわっていないからかわいくないですね。かわいくないと家庭が楽しくない。楽しくないと、また帰ってこないという悪循環が生まれます。これを僕らは「パパのデフレスパイラル」と名付けました。なんか出口の見えないところに入ってしまいたいな感じですね。「悪循環を断つのは、時間という名の鉄しかありませんよ。いいじゃん、今は。多少家庭にシフトして」。僕らはまるでプリウスのような、ああいうハイブリッドなパパを増やしたいんですね。つまり、仕事をするなど言っているのではない。仕事も食い扶持だから大事です。でも、状況に応じて、ガソリンエンジンと電気モーターを瞬時に使い分けるようなパパたちを増やしたいと思っています。

子育て期はちょっと家庭エンジンを高めていく。「子どもが中学ぐらに入ればそんなに病気もしなくなるし、自分でご飯もつくれたりするわけだから、またフルタイム働ける。そのときはまたこっちに戻せばいいじゃないか。奥さんが一番大変なときに仕事ばかりしていたらどうなるか想像したほうがいいよ」と言います。

「男性（パパ）の子育ての悩み・課題 ③子どもが生まれてから、夫婦関係が悪化した」

夫婦関係もおかしくなるんですね。パパたちの悩みの半分はこれです。妻との関係。このあいだ、「ママが機嫌が悪いんです。2週間僕と口を利いてくれませんか。どうやってケアしたらいいですか。何のスイーツを買って帰ればいいんですか」とか聞いているのです。そういう問題じゃないでしょう、と申し上げました。またそこで技術論に走ってしまう。それは離婚に至る場合もありますが、至らなくても、子育てにとってもあまりよくないですね。子どもの荒れ、いろいろな非行が思春期になると出てくる。

これが今問題になっている母子カプセルの問題です。母親の過干渉、過保護によって起きる。家の中に、専門用語でコクーニングとありますが、繭のような状態、おなかの中にいるような状態をつくってしまう。それが母性のなせる技。でも、子どもは殻を破ってここから自立しなければいけないのです。割る人がやっぱり必要なんですね。それがないと、家の中がずっとお母さんと子どもだけの世界になって、子どももお母さんにしかものを話さなくなります。外に出て行っても戦えないというか、自分の力で生きていけなくなってしまう。

今、企業で、ちょっとした人間関係や仕事のつまずきで入社拒否をする、20代の特に男子が増えています。よくよく聞くとやっぱりこういう状態です。傾向を見ていると、男の子のお母さんに多い。ひどい場合は、「駄目よ、パパみたいになっちゃう」とか言ってしまったりする。ますます帰ってこなくなります。そういう声は届きます。

女の子の場合でも、こういうお父さん、お母さんだと、結婚とか恋愛にいいイメージを持ってなくなってしまう。僕の知り合いでも、30代でなかなか結婚しない人に聞くと、親が離婚しているとか、あまり仲がよくなかったとか、ひどい場合には暴力をふるわれたとか、要するに、結婚や育児に対してすごくネガティブなイメージをずうっと植え付けられてしまうということがあります。

子どもにとって大事な自己肯定感や自尊心が育たない。これがないと社会に出ても活躍できません。これはやっぱり、お父さん、お母さんが、「『生まれてきてくれてありがとう』と言えるパパになろうよ。学校へ行っても、困っている友達を助けられるような子にしたいのだったら、パパが毎日どれだけママを思いやって暮らしているか、育児をしているかだよ。それを子どもはちゃんと見ているからね」。子どもは3歳から夫婦げんかを全部聞いています。はっきり言って、どっちがいいか悪いかも判断しています。小さい頃、僕らもやっていたのです。仲を取り持ちたりしていませんでしたか。子どもは、お父さんとお母さんがけんかをして家の中がぎすぎすしているのは嫌ですね。見ているとうちの子どももあります。でも、自分が大人になると忘れてしまうんですね。自分がけんかをする側に回ってしまったりする。こういったメカニズムは、実は引きこもりの温床と言われています。こういったこともパパたちにちゃんと理解を深めてもらいたいと思っています。

「女性の愛情曲線」（講演資料 P21）

ちょっと面白いデータを持ってきました。次のスライドは、一緒にイクメンプロジェクトをやっている東レ経営研究所の渥美由喜さんが作成したグラフです。彼は2児のパパで育休を2回取っています。彼が1,000人ぐらいの女性にリサーチしたデータです。

対象は、40代、50代の、子どもが高校とか大学ぐらいになる女性たちです。女性の愛情は、その女性のライフステージの中でどう向かっていくか。最初、独身の頃は仕事、研究。それによって、空いた時間は趣味、おしゃれ、グルメ、旅行といったものにいきます。そのうち彼氏ができる。彼氏と時間やお金を共に使うようになります。結婚します。数年後にめでたく子どもが生まれると、その瞬間に愛情曲線は子どもに行ってしまうんですね。夫は、たいていその瞬間、地の果てに落ちます。そうだったでしょう？ これはしょうがないですよ。最初の子は特にそうです。これは母性本能なんですよ。

でも、この時期、パパたちが僕らのセミナーに来て、「寂しい。ママがかまってくれなくなった。一緒に寝てくれなくなった」と言います。「それはおまえのいびきがうるさいだけだよ」とよく言いますが。実は、ここが一番浮気の発生率が高いのです。

女性は子どもを産むと仕事を辞めてしましますが、子どもが成長したらパートぐらいは始めるので、仕事の愛情曲線はM字カーブを描きます。趣味ははなからあきらめてしまうので愛情曲線は低いままです。

夫への愛情曲線を見ていただくと、回復していったグループと、もう一つ低迷グループに二極化しました。低迷グループのほうが数が多かったです。なぜかと思って渥美さんが数百人の女性にヒアリングをしたら、みんな口をそろえて、「この時期でした」と言うのです。産後、子育てに協力的だった家庭の奥さんの愛情だけが回復しているのです。この（産後、子育て）時期に全くやってなかった、立ち合いにも来なかった。「あなたは私が大変なときに研究ばかりしてたわね」、そんなふうに言われて、その恨み、つらみを抱ながら、母親が1人で育児をしていきます。高校を卒業したら一段落でしょう。このあとに夫の定年というやつが待っています。そうすると、年金を分割されて、はい、おさらば。ザ・熟年離婚が待っているケースが今多発しています。

日本の離婚の山を見ていると、一番多いのが——子どものいない夫婦も多いですが、子育て家庭においては、0～3歳の子どもがいる家庭です。本当は一番ハッピーなはずなのに、そこでママたちの臨界点に来て、強制終了になるんですね。次に多い山が熟年離婚です。二つの山の相関関係をはっきりと証明したリサーチです。いかがでしょうか。

低迷グループの先にあるのは熟年離婚。でも、回復グループの先にあるのは2人で行く楽しい温泉旅行。羽田から行く韓国ツアーが待っています。チャーミーグリーンの世界です。パパたちには、「どっちがいい？ 今、君がやっているこの時期の育児は、実はこのときだけじゃないんだよ。子どものためだけじゃない、君たちの老後の問題にもかかわってくるんだよ。君がもし要介護になったら復讐されちゃうかもよ」と脅かしておきます。介護は今、男性もやりますが、やっぱり仲むつまじいほうが、介護であって

もうまくいくのではないかなと思います。いかがでしょうか。

「父親と、家庭・地域・社会の関係変化」（講演資料 P22）

僕らは父親を支援するNPOなので、そうになってしまうのを父親だけの責任にしないというか、追い込まない。追い込んでもうろくなことはないです。

つまり、「君も悪気があって帰って来ないのではないよね。帰りたくても帰れない。」成果主義、実力主義。狩猟民族のシステムの中で生きているから、会社がすべてになってしまう。ここにぶら下がっていないと自己実現できない。サラリーをもらえない。どんな大企業でも、今、つぶれるリスクがあります。部長が残っているから帰れないという、育児時間を奪われて、ここにいる人が、つらくなって、コストだけは払って育児を外注化しているような状況になっています。

かつては地域ともつながっていたから、この人もそんなに悩まなかったのだけれども、最近は分断されているので、1人でマンションの一室で子どもを隠すように子育てをして、いろいろな事件が起きてしまう。

これは、実は100歳以上の高齢者の行方不明問題と根っこは同じです。家族、地域とつながっていない人が最終的にこぼれていく。日本はそういう状況になっています。これを何とかしよう。昔には戻れないし、いきなりノルウェーにはなれませんから、僕はこの辺に現実的な日本オリジナルの着地点があると思っています。でも、育休がまだ1%だから、これがまだ描けない。当たり前前に20%、30%取れるようになって、「ここにあるじゃないか、僕らの生き方が」というところへ持って行きたいと思っています。そういうことをセミナーやワークショップ等々で教えます。

「FJセミナー」「FJワークショップ」「FJパパごはん教室」「FJツアー」

絵本の読み聞かせ、工作教室、ベビーサインというのをやっています。アメリカで開発された赤ちゃんとのボディランゲージで、パパたちも受けます。コーヒースクールはタリーズコーヒースさんとやっています。これは育児ではないですが、楽しい家事を教えます。一番ポピュラーなのが料理教室で、頻繁にやっています。

男の料理というと、そば打ちとか、野外のバーベキューとか、あるいは本格的イタリアンというのがありますが、ママに不評なのでそういうのは教えません。子育て家庭は時間もお金もないので、冷蔵庫の在庫でちゃっちゃとつくれるチャーハンや焼きそば。スピーディーに子どもに食べさせられるものをやろう、パパがランチをつくってみんなで食べるというのをやっています。

生まれて初めて包丁を握ったようなパパたちがいますが、先生の指導の下でできるんですね。その達成感。それを食べてもらう。ママが「おいしい。パパ、やればできるじゃないの。また家でもやって」。娘も、「パパ、おいしい。またつくって」。これで達成感を持てるのです。人間は、誰かにほめられて、達成感があって初めて向上心が出て

くるんですよ。こういったことを僕らは教えます。もちろん皿の洗い方も教えます。

この写真は、短期決戦で、キャンプです。お母さん抜きで、軽井沢の山奥の星野リゾートで、子どもと向き合っ、いろいろなお世話をしたり、料理をつくったりして愛着を深めてもらうということをやっています。これはすごく有効です。

何でこういうことをやるかという、現代の忙しい父親たちにとって、家というのがすごく縁遠い、帰りづらい場所になってしまっているのです。東京に新橋というサラリーマンのたまり場があります。1回、そこで何人かにヒアリングをしたことがあります。携帯の待ち受けを見たら子どもが写っている。毎日行って、「こんなにかわいい子がいるのに、何でこんなところで飲んでいるの?」と聞いたら、ほとんどの男性が、家に居場所がないという答えでした。「帰っても母親と子どもの世界ができてしまっている。9歳の娘と何を話していいかわからない。中学生の息子は僕と全く語らない。どうすればいいんですか。家でやることがないんです。だから新橋に行ってしまうのです」。

「パパにとっての家とは？」（講演資料 P27）

そういうパパたちは、現状、家がホームではなくてアウェーになっている。アウェーは敵地です。やってもやっても「駄目ね」という低評価しか下さない奥さんと、「ママじゃなきゃ嫌だ」と言う子どもしかいないと、たちまち家が敵地化するんですね。ホームはどこにあるかという、ホームは職場です。研究室です。そこにいれば楽しい仲間がいっぱいいます。頑張れば、監督、教授、上司がほめてくれる。いいレギュラーポジションがとれるのです。最後には年収も上がるかもしれない。そっちのほうで全然意味のある場所になってしまう。家は妻に任せておけばいい。それでさっき言ったようないろいろな問題が起きます。

解決策は、やっぱりパパたちが自分で努力するしかない。「帰りたくなる場所にする。そのためには何でもいい。僕は絵本の読み聞かせでしたが、料理でも、お風呂へ入れるのでも、『これはおれの仕事だ、父親の仕事だ』というものを持とうぜ」。僕らはいろいろなワークショップのプログラムを持っています。何でもいいのです。どのパパがどれではまるかわからない。実は、それがあれば時間通りに仕事を仕上げちゃんと帰ってくるんですね。それがいないパパは、見ていると、9時以降、大体新橋やパチンコ屋にたむろっています。

つまり、自分の役割、居場所をつくらうということです。あと、休む。体を癒す場所だけれども、同時に働く場所でもあるということです。皆さんは「働く」の語源を知っていますか。「はたにいる人を楽にする」という意味から働くという言葉が生まれ、人が動くという漢字が生まれました。

「同じ船の乗組員として、妻の家事労働を年収に換算すると、実は1,000万円以上なんだよ。それをやっているんだ。君だけが何か仕事をしているということではないでしょう。うちに帰れば、家事・育児は共同の作業なんだよ。君が働けば、いったい誰が楽

になるの？ 『楽』と『楽しい』も同じ漢字なんだよ。家族みんながハッピーでしょう。家というのは、君も含めてそれぞれが役割を果たして楽しく暮らすことで、マイホーム、アットホームになるんだよ」ということを教えます。しかも、子どもがいる場合は期間限定です。

「ワーク・ライフ・バランスの誤解」（講演資料 P28）

ワーク・ライフ・バランスも皆さんは誤解しているんですね。女性の問題ではない。男性の両立支援。育児・介護も含まれています。企業が言うと労務管理問題に聞こえますが、実は自分問題です。「ワークスタイル・イノベーション」、働き方を改革して、そこから生まれた時間を家庭に投資しようよという発想をしたほうがいい。

今、ノー残業デーを大企業がやりますが、早く帰ることが目的ではなくて、「早く帰って、お父さんの君は家族といたい何がしたいの」と問われています。

「豊かな人生のための、寄せ鍋理論とは？」（講演資料 P29）

僕らが推奨しているのはシーソー型のワーク・ライフ・バランスではない。仕事か家庭かどちらかを犠牲にするトレードオフの関係ではなくて、ワーク・ライフ・シナジーです。「仕事も育児も、全部寄せ鍋の中にぶち込んでしまう。そこから逃げずにやろうよ。そうするといろいろなことが相乗効果を生んで、つながってくるよ」。

僕は保育園に10年間毎朝行きました。今でも行きますが、そこで出会ったパパやママと本業の仕事を何回もしました。僕は広報、マーケティングのプロですが、それが学校のPTA活動に生きるんですね。僕は、育児でおむつを、3人の子どもで5,800枚替えていますから、親の介護をしたときにもけっこううまくいくのではないかなと思っています。こういったいろいろなステージから逃げずにやっていくと、相乗効果を生んでよくなるよということです。

「父親が育児に関わるメリット」（講演資料 P30）

あと、パパたちには、こういった育児のメリット、「君がかかるとこんなにいいことがあるよ」と教えます。サラリーマンのパパたちは成果主義の中で生きていますから、やっぱり、君がやるとどういふ成果があるのかということを書いてあげないといけないですね。奥さんたちから「私はつらいんだから、やってよ」と言われてもやりません。というか、単なる家族サービスで終わってしまいます。そうではない。もっと主体的にかかわるためには、こういうロジックをつくってあげないといけない。伝えてあげなければいけない。

「子育てパパは仕事もデキル！ ～仕事に生きるパパ力」（講演資料 P31）

実際、働くパパたちには、「子育てをしていると、こんな能力がいっぱい手に入るよ」

と言っています。僕も実際、これですごく仕事が楽になりました。僕は定時で帰る部長でした。僕が早く帰ると、部下たちも早く帰りやすくなる。帰れるようになってくる。みんなプライベートも仕事も充実してくる。

「現代の父親に必要な真のパパカ」（講演資料 P32）

パパカというのはスライドに挙げたようなこと（①ママを支える、②パパ友をつくる）です。「おむつを替えたり、ディズニーランドに行くだけではありません」と言います。

「父親ネットワークが地域社会にもたらすもの」（講演資料 P33）

地域社会もこんなによくなる（①地域の安全性が高まる、②子どもの居場所が増える、③子どもたちが多様な父性に接し、社会性や職業観が育つ、④持続可能な共生社会が構築される、⑤コミュニティが活性化し、社会資本（資産価値）が高まる）。僕が13年間地域で活動して得た結論です。

「Fathering（ファザーリング）とは？」（講演資料 P34）

ファザーリングとは、父親であることを楽しむことです。子どもは人材です。「ひょっとしたらノーベル賞を取るかもしれない。そういう人材を育てている、未来を育てる父親ほど地球上で素晴らしい仕事はないよ」と言っています。育児は期間限定のプロジェクトXです。男性はプロジェクトXが大好きでしたよね。皆さんもそれに向かっているのでしょうか？ でも、あれはほとんど家庭を犠牲にしていたプロジェクトXです。奥さんを泣かせ、誰かに我慢を強いてつくったトンネルやロケットの話だったと僕は記憶していますが、いかがですか。

これからは家族が犠牲にならないプロジェクトXをまずやるべきです。それが名実ともに期間限定の子育てです。それができて初めて仕事のプロジェクトXも生きるのではないですか。もっとマクロで言えば、誰かが犠牲になる経済成長は、僕は要らないと言っています。皆さん、いかがでしょうか。育児は能力開発のチャンス。それによって転職をしたり、別世界に行ってしまうパパもけっこういます。僕もそうでした。

「笑う父親になるための、ファザーリングの極意6カ条」（講演資料 P35）

「よいパパでなく、笑っている自然体の愉快的パパになろうよ」と僕らは言っています。その極意をまとめるとスライドに挙げたようになります（「子どもができたらOS（父親ソフト）を入れ替えよう」「義務から権利へ。客体から主体へ。さらば家族サービス」「男の育児は、質より量。イイトコドリ育児をやめよう」「子育てパパは仕事もデキル。育児で備わる三つの能力」「パートナーシップの構築～妻の人生は夫のものではない」「地域活動を通じて、シチズンシップを獲得しよう」）。さっき「OSを入れ替える」とか、「さらば家族サービス」とか、「いいところ取りはやめよう」とか、いろいろ

ろ言いましたが、男性の皆さん、気に入ったらこれだけ切り取って研究室の壁に張っておいてください、毎日見ることが大事ですから。妻の人生は夫のものではありません。勘違いしないでください。

「パパが育児を楽しむためにママができること。家をアウェーにしない方法」

パパのやる気を阻む門番（ゲートキーパー）のようなママがいますが、これはカナダの父親支援でも大きな問題になっています。日本は、東京とか、横浜や、神戸などは共働きが多いですが、愛知県三河地方とか南九州地方には、この門番ママが多く生息しています、僕らもこの攻略にてこずっています。

女性のOSが変わらなければ男性も変わらないということです。女性が、「これは女の仕事だ」と言って、自分で育児・家事を背負い込んでしまう。パパをはじき飛ばしてしまうんですね。かつての時代はそれでうまくいっていましたが、今の女性たちはみんな働くし、優秀です。活用していくためにはそういう意識も変えていかなければいけない。環境も変えていかなければいけない。

あと、お祖母ちゃん。「私は貧乏の時代に4人も育てたのに、何であなたは1人も」とか言ってしまうおばあちゃんもたくさんいます。こういった意識を変えてほしいと思います。ママも笑って子育てをしよう。

そういうわけで時間が来ました。いかがでしたでしょうか。父親の育児参加の最前線のお話をしました。増えているけれども悩んでいる。かつ、女性も変わらないと男性の意識も変わっていかない。でも、そういう男性が増えてくると、家庭や地域、あるいは職場も変わっていく。つまり日本中が、男性も女性も能力を発揮できる、あるいは子どもを産み育てやすい社会になっていくということを、僕は今、この事業を通して実感しています。皆さんもそれぞれが声を挙げて、自分でアクションを起こすことが大事かなと思います。

肝心なのは子どもたちの笑顔です。スライドの写真は僕の3人の子どもです。この子どもたちがいてくれるから僕は毎日輝けます。子どもは太陽なんですね。太陽を曇らせてはいけない。親だけではなく、すべての大人が責任を負っているのです。僕はそれを父親という人たちをうまく連帯することで訴えていきたいし、それによって日本がもっと本当の意味での豊かさを享受してほしいなと思います。長時間、ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 安藤さん、非常に面白い、そして貴重なお話をありがとうございました。安藤さんに質問がある方もいらっしゃると思いますが、一応、公の行事としては45分で終了ということになりますので、終了したいと思います。

皆さんにお願いしたいのは、今回新しい企画として、世の中の流れを知るうえでこういった男女参画の企画をしましたので、ぜひアンケートに、このような企画でどのよう

に感じたかというのを書いていただいて、会場をあとにさせていただければと思います。

また、安藤さんにはせっかく来ていただいたので、これから45分ほど、プラスアルファのお話、あるいは皆さんとのインターアクションをお願いしたいと思います。興味のある方はこのまま残っていただいてもけっこうです。

○安藤 このあと何をやろうかなと考えていましたが、僕らは最近婚活支援もやっています、独身の女性だけ集めて「イクメンの見分け方講座」をやっているのですが、毎回すごく盛況です。もしこの中に独身の女性がいましたら、実はイクメンの見分け方があるのです。僕らはチェックシートもつくりました。こういったお話ができればいいなと思っております。

○司会 それでは、最後にもう一度、安藤さんにお礼の拍手を送りまして、これで終わりにしたいと思います。（拍手）大変ありがとうございました。安藤さんには少し休んでいただいて、数分後に始めたいと思います。ありがとうございました。

第2部 質疑応答

○安藤 第1部の講演についてでもいいですし、ほかのことでもけっこうです。何かあれば。

○発言者 1 大変素晴らしいご講演をありがとうございました。私は会社に勤めているのですが、会社のほうでもこのようなお話を何回か聞いていて、あまり腑に落ちなかったのですが、父親という立場で話されたのを初めて伺いまして、すごく新鮮に思いました。

自分は今4歳の子どもがいますが、奥さんは家にいるので幼稚園に通ってまして、保育園だと男性もけっこう平等にできるのかなと思いますが、幼稚園でママ友の中にお父さんが入っていくというのは（入りにくい）。けっこう頑張っているつもりですが。周りにも何人かそうしたいとたくらんでいる人がいるのですが、そこでもやはり入りにくいところがありまして、その辺で何か一つアドバイスをいただきたいと思えます。

○安藤 よく出る質問です。自分1人だと男性はなかなか難しいので、2人でも3人でも、まず仲間で何かプロジェクトチーム立ち上げみたいな感じにする。それは、ただ自分たちの飲み会をするのではなくて、子どもたちの笑顔というか、幼稚園の先生方とイベントを一緒にやったりとか、ミッションを持つということですね。

男性は、育児でも、地域活動でも仕事化するタイプが多いので、ただただらだらと集まるのではなく、目的意識をちゃんと持つといいのではないかなと思います。それをあなたが企画書か何かに書いて提案するといいいんじゃないですか。メールアドレスを

聞いてぐるぐる回すとか、僕らはそうやって増やしていきました。

僕は今、地域に40人のパパ友がいます。保育園や小学校で出会ったパパたちです。そういうパパたちがいてくれると非常に安心感があるんですね。ずっと自営業の人もいるから、僕がこうやって地方に来ているときに東京で地震が起きてもなにか安心できる、そういうセーフティーなものなんだよということをママたちにも教えてほしいです。

ママ友の中に入っていくのは、針のむしろ状態になるとよく言いますが、僕はそういうのは大好きです。そういうハードルはあると思いますので、まず意識の高いパパたち3人ぐらいで始めるといいのではないかなと思います。

○発言者1 ありがとうございます。特に「プロジェクト化する」というのが、嫁さんに、休みの日とかに家で何かやれと言われても、具体的に「洗濯物を畳め」とか言われるとできますが、そういうのを言われなくなかなかできないので。

○安藤 ママたちは部分部分で言ってきますが、男は基本的に全体像が見えてないと不安なんですよ。流れというか、ママたちにも「全体の中のここをやるとうまく回っていく、といったことを教えてあげるといいよ」と僕らは言います。

○発言者1 どうもありがとうございました。

○発言者2 こういうセミナーなどを開いていると、けっこう年配の方もいらっしやいます。自分の考えというか、こういう考えと全く違う上司を説得するには、どういうふうに入ったらいいのかなとちょっと思いました。

○安藤 一番ポピュラーな質問ですね。抵抗勢力というやつですね。さっきも途中で出ましたが、それはやはりもう時代は変わったということをまず認識してもらわなければいけない。「あなたが育児をしてきた頃と今とでは、男女の役割も経済状況も変わってきた。それから、あなたの優秀な部下たちを辞めさせないためにも、こういった考え方を持ちましょう」ということを、まず論理的に言わないと駄目です。

それプラス、「部長、ひょっとして、そろそろ介護とかが始まるんじゃないですか」とか、その世代に当事者意識を持たせるためには介護の話がいいです。育児・介護休業法ですから同じ法律です。やることは同じです。おむつを替えたり、ご飯をつくったり、お風呂に入れたりするのは育児も介護も同じですね。待機老人の話をするといいですよ。待機老人というのは、要するに公的な養老院とか老人ホームに入れないお年寄りのことで、今、日本に40万人いるのです。待機児童は4万人ですから10倍です。薬局の店頭も、今は子ども用のおむつが並んでいますが、10年後には介護用に逆転するのではないかとされています。

団塊の世代があと十数年で後期高齢者、75歳以上になっていきます。ここで起きるのは介護ビックバンと呼ばれる現象です。介護をする人がものすごく増えてしまう。公的施設が増えないと保育園と同じ状況です。民間の質の高いところは、入るのに

1,000万の保証金と、毎月15-16万のランニングコストを払わなければなりません。「住宅ローンと教育ローンを払いながら（介護施設のローンが）払えるんですか？だから、男性が育児休業を取れるような組織にしておいたほうが、あなたの介護休暇のときも楽だよ」と言ってあげる。男性が普通に休暇を取れば、みんなで業務の共有化ができるでしょう。研究職の人たちはまたちょっと違うのかもしれませんが、一般の企業では僕はそういう言い方をします。

でも、男性たちは自分がいないとこの会社は回っていかないと思っていますが、そんなことはありません。試しに有給で3日休んでもらって、そんなことでつぶれてしまう会社はヤバイでしょう、と教えたいですね。マネジメント層というか、上司というのは、生きてきた時代も違うし、こういう客観的なデータを示しながらやっていくといいのではないかと思います。

日本の企業は、世界中から「少子化の加害者」と言われています。ああいう働かせ方とか、過労死とか。「過労死」は国際用語で、オックスフォード英和辞典にも「Karousi」と書いてあります。そういう国なんですよ。そうではなくて、男女がもっと自分の能力を生かせるような社会にしておくことが大事です。特に、「男性ばかりにぎゅうぎゅう働かせて、過労死をこんなに出している国だと、結果的に子どもも増えず、従業員も減り、最終的にはこちらの企業は少子化の被害者だよ。つくってもつくっても国内では売れないじゃん」。そんな話も少ししながら、僕らはもう少しポジティブな話をします。

粘土層の人たちはなかなか変わらないです。僕は「粘土層」と呼んでいます。粘土層の人は水を垂らしても染みていかない人たちですから、粘土層を変えるのは相当な時間と覚悟が必要だなと思いますね。よかったら行きますので、呼んでください。僕は毎日のようにやっていますから。いかがでしょうか。

○発言者 3 今日のお話ですごいなと思ったのは、早く帰ろうにも帰れないから、労働生産性を上げることに取り組んでいらっしゃる、ということです。具体的に、例えばどういうことをやってらっしゃるのか教えていただけますか。

○安藤 わかりました。うちの会員ではポピュラーになっていますが、朝の時間の有効活用です。大企業に勤務しているパパたちもいっぱいいますが、大体定時では終わりませんから、残業をしないで仕事を持って帰ります。うちへ帰って、ご飯を家族と食べる。そして、すぐに自分の部屋に閉じこもって仕事をしません。そのあとも、お風呂に入ったり、絵本を読んだりして、子どもと一緒に9時半とか10時に寝てしまうのです。そうすると、朝、3時とか4時に目が覚めますから、朝の3時間仕事をす。僕もたまにそれをやります。

その3時間というのは上司や取引先からは電話がかかって来ない。家族も寝ているから育児もしなくていい。ものすごく能率が高い時間です。彼はそのあとご飯を食べ

て、保育園に行ってから会社に行くのです。それでまた早く帰ってくる。それが子どもにも会えるし、仕事も進むというタイムマネジメントです。

日本のフレックスタイム制を見ていると、ほとんどの人はだんだん後ろにずれていくのです。遅くまで働くから朝起きられなくて、子どもが幼稚園に行ったあとに起きて、だらだらと昼頃に出掛けて行くみたいなことをやっています。そうすると子どもと全然会えない。子どもの生活とずれてきてしまう。僕らは前倒しの方法を教える。

仕事で忙しいのはわかるけれども、子どもと一緒に楽しみたいのだったら、なるべく前に前にずらしたほうが良いと教えています。それができれば苦労はないという話ですが、やっているパパはみんなうまくいっています。仕事の業績も上がっているし、家族との関係もよくなっています。

もっとということなら、さっき言ったようにメールの書き方とか、コミュニケーションのとり方とか、飲みニケーションの断り方も含めたことも教える。

メールの書き方で言えば、僕も今、毎日、仕事のメールが200本ぐらい来ますが、見ていると、やっぱりうまい人と下手な人がいますね。うまい人は、僕に対して何を要求しているかということを書ける人です。こっちが答えやすいように書いてくれる。1通目はいいですが、2通目にも気候の挨拶とか自分の思いをすごく書いてあって、一番下に要件が書いてあるような人は、僕はすごく腹が立ちます。長文メールは、相手の時間を泥棒する、奪っていることです。長文メールは時間泥棒と僕らは言っています。自分は、「失礼があつてはいけない」とか、「より自分の思いを伝えたい」と思って書いているけれども、書くということは読む人がいるということですから、その人の時間も奪ってしまっているということです。「メールなんて単なるビジネスツールだから、本当の実務の連絡だけでいいじゃん。思いを伝えたいのだったら手紙を書けば。逆にそのほうが伝わるよ」と言っています。

そうやって日本中でみんながみんな、長文メールを午前中に書きまくっているからみんな帰れないのです。見ていると、労働時間はパソコンが増えてから伸びるようになりました。昔はなかったでしょう。午前中とかに、みんな電話だったじゃないですか。電話は割と早く終わるのです。それをメールでやって、3日ぐらい返事が返って来ないと、その仕事をずっと引きずっているのです。

相手の時間を奪ってしまうから、僕は、メールが来たら瞬時に返すということをやっています。僕の書き方は、1分で3行で返す。ポイントだけしか書いていません。何か問題があつたら、わからなかったら電話をしてあげれば良いのです。僕らはそういうことを具体的に教えています。ワークスタイル・イノベーション（働き方の改革）、それで時間をつくるということです。長文メールを書いている人は改めてください。相手の時間を奪っているんですよ。相手にも家族があるのです。独身の人はデートする時間が必要です。

ほかにはいかがですか。男性ばかりですね。こういうとき、女性は大体手を挙げない

ですよ。

○発言者 4 来年1月に初めて子どもが生まれる予定です。

○安藤 メインターゲットです。スクールにどうぞ。

○発言者 4 最初に何をしてあげたらいいのかまだ全然わからなくて、今日もセミナーを聞きましたが、明確に「こんなことをやってみたら」というのがあれば教えてください。今は掃除とか全般は自分がやっています。生まれてから沐浴以外にやってあげられることがあったらと思うのですが。

○安藤 全部です。(笑い) どれかをお勧めしてくれという話ではないと思うんですよ、実際。もちろんママもいるし。産後3週間は どうしますか。里帰りしますか。

○発言者 4 家です。

○安藤 病院で産んで、4日後に帰ってくるんですね。

○発言者 4 はい。

○安藤 すべてそこから始まります。ママは、産後3週間は、自分のトイレと、ご飯を食べるだけで(ほかは何も)できません。ご飯を全部つくって、トイレの掃除もお風呂の掃除も全部やるんです。

○発言者 4 わかりました。(笑い)

○安藤 1カ月で2キロやせるね。僕は最近イクメンダイエットと呼んでいますから、全然OKです。いい顔で帰ってきてください。

○発言者 4 わかりました。

○安藤 さっき言ったように、一生懸命やり過ぎない。もちろん、やらなければうまくなりません、あまり思い詰めるとブルーになってきますから、ママと情報交換をうまくしながらやってください。

立ち合い出産ですか。

○発言者 4 立ち合いはできない病院なので、しょうがないです。

○安藤 残念ですね。でも、楽しみですね。

○発言者 4 ありがとうございます。

○発言者 5 第一部で、「女性の発表が少ない生化学会」というのがあったので、それを如実に表しているなと思いましたが、こういう場ではなかなか質問しにくいというのもあります。

うちは4歳と2歳の育児中で、うちの夫は先生がおっしゃっていた超イクメンで、ほとんどあてはまっています。ただ、われわれに欠けていることにも気が付きました。地域との交流は全くないのです。アカデミックなので、やっぱり3年ごとの異動です。今は山形ですが、3年の予定なので、保育園の先生とは話をしますが、「お隣の人は知らない」みたいなのがあります。自分で情報を発信する余力はほとんどなくて、

研究と育児だけでいっぱいという感じです。

2人で、「社会から孤立している気が時々するね」と言っていて、もちろん研究は楽しくやっているし、子どもとも楽しくやっていますが、やはりなにか社会から離れていっているのではないかという不安感はすごくあります。

もちろん3年か4年ぐらいすれば解消するのだろうなと思っていますが、職業柄、異動が多くて、地域にかかわるとかいう部分が希薄な私たちのような者がいるんだということを知っていただいて、機会があればそれに対する対抗策ではないですが、何か情報が集積していけばなと思います。

○安藤 そうですね。ありがとうございます。企業の転勤族の人たちから同じような悩みを聞きます。やっぱり、地域とのネットワーク、きずなというのは、今の時代、待っていても来ないですね。かつては当たり前にそういった仕組みがあって、そこにいれば何となくつながっていきましたが、今は、さっき言ったように分断されているので、より意識的に、あるいはアクティブに自分から動いていかないと難しいだろうなと思います。

だから、僕らは「パパ友をつくろう」と言っていますが、まず地域というものの重要性に気付くということです。子どもは家庭の中だけで育ちません。誰でも3歳になれば幼稚園に出て行くし、どんどん距離を延ばしていく。そこは安全な場所であるし、子どもはそこで自立していく。でも、それは子どもだけでなく、お父さんも成長していく場なんだよということを伝えます。

そこで「じゃあ、どうすればいいんですか」と聞かれれば、僕は、「保育園とか、町会とか、マンションの自治会とか、そういうところの何か役員とかをやってしまえばいい」と言います。そうすると、やらざるを得ない。「忙しくてできない」ではなくて、そういうことをやればその時間をつくろうとします。ニワトリか卵かみたいな話になってしまいますが、やっぱり何もやってないと、ただ仕事だけをしてしまうと僕は思います。

僕がPTA会長をやっていた小学校には、今、サラリーマンのパパが3人、本部の役員で入りました。彼らも、最初は「そんなことやるなんて絶対に思ってなかった。できればやりたくなかった。でも、やってみたらこんなに楽しい」。僕が会長のときに、いろいろな楽しいイベントとかをいっぱいつくって、それを残していきましたが、彼らは喜々としてやっています。その準備のために何回か平日の夜に集まるのですが、そのために仕事を早く切り上げて帰ってきます。僕は研究職の仕事の実態はわかりませんが、仕事を言い訳に地域の活動をしないという人は、いつまでたっても地域のきずなはできない。

これからは「関係資産の時代」と言われています。これまでの資産は、お金（貯金とか有価証券）あるいは不動産といったものでしたが、これからは「関係」。地域との関係、あるいは家族のきずなといったものを持っている人が、将来というか、老後、

ハイリターンが来るという考え方です。

さっきも言ったように、児童虐待とか、老人の行方不明、無縁社会の根っこにあるのは、実はそういったネットワークの問題だと僕は思います。実際自分も、13年間育児を地域で試みて、そういう仲間がそばにいるということの安心感は何ものにも代え難いと思います。

実際、3人目が生まれるときに、上の2人が小学生でしたが、平日の予定日だったので、病院へも入れないし、僕は立ち会うのでどうしようかと言っていたんですね。そのときに、同じマンションのパパ友が、「いいよ、いいよ、安藤さん。うちで預かるから、心おきなく産んできてよ」と言ってくれて、2日ぐらい預かってもらって、僕はずっと立ち会うことができました。学校でよく知り合っていたし、そういう関係があったからです。

誰かのうちがそうになったら今度はうちが預かってあげようと思います。それがいない人は実家から母を呼び出したり、あるいはベビーシッターを高額で雇ったりして、余計なお金とかをかける。遠くの親よりも近くのパパ友ということを僕はそのときにすごく学んで、それを今、みんなでやろうよと呼び掛けています。そうやって意識的に仕掛けて、働き掛けていけないとなかなか難しいだろうなと思います。

ある転勤族の人がそれをやって、そこからまた転勤を命じられたのですが、そのできた関係性を失いたくないので、このあいだその会社を辞めて地元の企業に再就職しました。「多少給料は減ったけれども、これでいい。このまちが好き。ここで骨を埋めたい。子どもたちもここで育ててほしい」と言っていました。それは、自分がつくった関係性、地域のきずな、ネットワークが、彼にとっての財産だと思ったのです。いろいろな考え方がありますが、そういった例もあるというお話でした。

○発言者 6 私も生まれたばかりの娘がいるので、今日のお話をすごく興味深く聞かせていただきました。話の最初のほうにも産後うつという言葉ありましたが、安藤さんの活動を通じて、そうならないようにするために何かヒントとかがありましたら教えていただきたいと思います。

○安藤 こういうパパがいっぱい来ます。個人差もありますが、実はホルモンの問題もあるので、必ずしも「(こうすれば)ならない」とか、「こういうのを飲んでおけば(ならない)」というのはないですね。

ただ、環境的要因としては、やっぱり孤立化とか、さっき言ったような自己の問題とかがすごく大きいです。姑からのプレッシャーもありますが、自分自身の立ち位置がぐらついてしまうということがあるので、そこはやはり夫婦でちゃんと向き合って、今は出産・育児で追われているけれども、将来について話し合ってみるとか、そういうことが大事です。

それ以上に、やっぱり日頃のパパの協力がないと非常に難しいです。おばあちゃん

とかがいれば多少はいいかもしれませんが、もし夫婦2人でやっているのだったら、特に産後2年ぐらいはなるべく早く帰るようなことをしていかないと難しいなと思います。なつてからはけっこう大変ですから、やっぱりならないような予防を心がけてほしいなと思います。

うちの会員にも、2人目の子どもが生まれたときに産後うつに陥ってしまった妻を抱えるパパがいます。その奥さんが、産後うつが発症して半年後に、発作的に手首を切ってしまいました。産後うつは自傷行為にもいくんですね。自殺する人はみんなそうです。これはまずいと思って、彼は銀行マンですが、多少働き方を改めて、会社にも事情を話して、早く帰れるように部署を変えてもらいました。

しばらくして、落ち着いたかなと思っていたのですが、あの病気はすごく根深くて、治るまでに4年ぐらいかかります。ちょっと気を抜いたら、目の前で、スーパーのエスカレーターの上から発作的にママが子どもを突き落としてしまいました。これはまずいと彼は思って、病院にも行きましたが、彼はその1カ月後に辞表を書きました。

「そばにいる」といって、15年間勤めた銀行を辞めてしまいました。そうすると、みんなの人生が狂っていく。だから、「たかが育児」となめてはいけないと思うのです。

男性というのはやっぱり自分のお母さんのイメージが強いんですよ。自分を立派に育ててくれた強い母親のイメージが強くて、それを自分の奥さんにも当てはめてしまう傾向があります。母は強いから大丈夫だろうと思っている。でも、やっぱり、さっき言ったように時代も変わったし、環境も違うのであれば、もったきちんと受け止めて、あとは万が一のときの相談先とかを知っているとか。うちのペンギンパパ・プロジェクトに相談先とか全部書いてあります。

ただ、僕もこのあいだ知ったのですが、日本のクリニックは、産後うつを一生懸命やっているところがまだすごく少ないのです。また、精神科に行くことの抵抗もあつたりして、ひどくならないといかないケースもあります。いろいろ兆候はありますから、その辺はうまく夫がキャッチして、産まれた産院の内科とかでもいいと日本助産師会の人っています。

○発言者7 面白いお話をたくさんありがとうございました。私は女子学生が多い職場にいまして、晩婚化が進んでいるのと、子どもを産まない傾向が進んでいるのをすごくひしひし感じています。ちらっとさっきおっしゃったイクメンの見分け方とか、イクメンのつくり出し方を。

○安藤 やっぱりそこにいきますか(笑い)。

○発言者7 その辺をちょっと幾つか教えていただけたら、壁に張っておきたいと思います(笑い)。お願いします。

○安藤 僕は、『日経ウーマン』という雑誌と共同でチェックシートをつくりました。今は持ってないのですが、メールでもいただければファイルを送ります。イクメンに

なれそうな男性の傾向としては、自分のことばかりでなくて、人の話を聞く力を持っているとか、あるいは、腹を割って話せる友人がたくさんいるとか、思いやりとかコミュニケーション力が高い男性がイクメンになれる確率が高いと思います。つまり、独りよがりではない。

逆に、自分が中心みたいな人はやっぱり難しいです。子どもが生まれても、自分の仕事、自分の研究のほうが大事になってしまうようなタイプは、なかなか難しいだろうなと思います。それは、家族だけでなく、一緒に仕事をする同僚も同じことです。「一緒に仕事をしたい人はどういう人」というふうに考えるとおのずとわかってきます。

セミナーでは具体的に見分け方を教えますが、一番いいのは彼氏の実家に行ったときです。彼氏自身をずっと見ているとなかなか見えてこない。そろそろ結婚みたいな話が出たときに、彼氏の実家にご挨拶とかに行きますね。お父さんが生きてらっしゃるのなら、お父さんがいるときに行ったほうがいい。「お父さんを見てこい」と言います。「何を見ればいいんですか。顔ですか」、「顔じゃないよ」。「見るべきは、お父さんがお母さんに対してとっている態度を見たほうがいいよ」。

つまり、息子の彼女が来るのだから、お父さんからすればけっこう一大事なわけです。「『よく来たね。20歳を過ぎているんだらう。一緒にビールでも飲もうか』と言って、自分で冷蔵庫を開けてシュポッと栓を抜いてついでくれるお父さんの息子はOK。そうではなくて、なんかどかっと座って、箸1本動かさないで、『お母さん、タカシの彼女が来ているのにまだ何もつくってないのか。駄目じゃないか』と文句ばかり言っているお父さんの長男はやめたほうがいいよ」といつも教えています（笑）。長男はたいていその生き写しだから。

もっと言うと、「しずしずと何か持ってきて、『すみません』なんて謝っているお母さんの姿が君の20年後だからね。その確率が高いですよ」。そうすると、「うちの彼氏はそうです。長男です」とみんな言い出す。「あなたが長女だともっとヤバイよ」と教えます。長男長女（のカップル）は今けっこう離婚率が高い。なぜかというところ、2人ともしっかり者です。見ていると、育児の主導権争いとかをしています。こればかりは自分で選べないのしょうがないですが、イクメンの見分け方もそうやって教えます。

もう一つ、彼氏の実家へ行ったら、リビングだけでなく彼氏の部屋にも行ったほうがいいと思います。「あなたのいた部屋を見せて」といって見に行くと、そこには青春時代のいろいろな残骸が残っています。見るべきは本棚。本棚に漫画とかが入っていますよね。漫画のタイトルを見たほうがいいです。『課長島耕作』とか、『サラリーマン金太郎』とか、本宮ひろし系の漫画ばかりの人は俺様主義の人たちなので、基本的にやめたほうがいいです。「えー、うちの彼氏は課長だけでなく『社長島耕作』まで持っています」、「それは相当危ないね」。そういう人は自分のドリームみ

たいなものを追ってしまう人です。さっき言った家族を犠牲にしてプロジェクト X に走るようなタイプです。「君の人生は漫画じゃないから」といつも教えます。

僕からすると、逆に、『ガラスの仮面』とか『エースをねらえ!』なんかを読んだりする男子なら OK かなみたいな感じです。そればかりではないですけども。

それで、「うちの彼氏、残念」というのではなくて、彼氏をイクメンにする育て方も一緒に教えます。さっき言ったようなアウェーにならない方法もそうですし、もっとパパが笑顔で子育てができるようなやり方を女性たちにも教えてきました。

あまり参考になりませんね。でも、その見分け方講座で、僕が言うまでもなく、最後に女性たちが気付くのは、「安藤さんが言いたかったのは、見分け方とかではないんですよ。つまり、私がこれからどうしたいのか。仕事・研究を続けたいときに、どういう人と結婚すればいいのかとか、自分自身がどうしたいのか、どうありたいのか、どうしていききたいのか、仕事を続けるのかどうかも含めて、そういうことを今日は考えさせてくれました」みたいなことを、みんな口をそろえて言います。

結局、僕はそういうものだと思います。だから、僕は妻の夢も知っているし、それを応援したくて自分の仕事のペース配分なんかもします。そういう本当のパートナーシップみたいなものをどれだけ持てる相手とめぐり会えるか、そういう関係性をつくっていけるかということですね。

でも、見ていると、結婚する前にそういう重要な話を全くせずに結婚している人が多いですね。子どもができたあととかに、「えー、おまえ、何、仕事するの?」とか言われているわけです。「それぐらい話し合ってから結婚したほうがいいよ。もし子どもが生まれたら、その先どうするのかぐらいはちゃんと話し合ったほうがいいよ」と教えています。

○発言者 8 この業界でイクメンを増やしていくためにはどこをポイントに変えていくとよいでしょうか?

○安藤 分子生物業界で。ああ、研究者のですね。うーん、そうですね。やっぱり、まず意識改革は大事だと思います。それと環境づくりという部分でしょうね。そういう上司というか、上の人の意識を変えたり、あるいは育休の制度とかが充実したり、あるいはキャンパス内に保育所があるとか、そういう育児がしやすい環境にしていかなければいけない。それは女性だけのものではなく。やっぱり意識改革と環境づくりがすごく重要ななと思います。

今の 20 代ぐらいの親は団塊の世代より下ぐらいで、不況も経験してけっこう苦勞をしているじゃないですか。一方で離婚も増えていますから、ただ結婚しただけではうまくいかないんだなということを学習している感じがしますね。

僕も、僕の父親は反面教師でしたが、やっぱりそういう価値観、自分たちには親と

は違うライフスタイルが浸透していますから、そういう中で自分流に自分たちの育児をしていきたいと強く思っています。

でも、なかなか企業社会は変わらないという、その現実苦しむパパたちということだと思えます。

○発言者 9 私にイクメンが必要だったのは四半世紀も前です（笑い）。今どなたかが質問されたお答えに、粘土層というのがありました。若い男性が、個人の意思ではイクメンになろうという気持ちがあっても、自分が属しているところでそのままには動けない。単に直属の上司に理解があるかないかだけでなく、組織としてそうせざるを得ないみたいなものが非常に根強いと思うのです。

そのところは、本当に四半世紀も前から、「どうしようもないな。社会は変わる気がないな」と思っていました。最後のほうのスライドで、「男性が変われば何とかが変わって、何とかが変わって、社会が変わる」というのがありました。本当にそこまでいくしかないと思いますが、それまでにどのぐらいかかるのかということと、それまでをどのようにして堪えたらいいか。「堪えたら」というか、切り抜けていけばいいのかと思えます。

○安藤 企業も、そういう悪いところばかりでなく、最近は随分先進的な企業も増えています。例えば、日立製作所は今、年間 100 人以上の男性が育児休業を取っています。あのぐらいの企業は立派な制度をみんな持っていますが、運用ができてない、活用してくれないという悩みが多かったのですが、ここ 2 年ぐらいで様子が変わってきています。

○発言者 9 企業のほうが、アカデミアよりはそういうところが進んでいるのではないかと思います。

○安藤 ワーク・ライフ・バランスは経営戦略です。そういうふうにしないと、うつ病とかが増えてしまっているし、やっぱりいい人材が入ってこないのです。今、大学 3 年生ぐらいで就職説明会というのがありますが、あれで、男子学生が手を挙げて、「この会社の育休取得率を教えてください」と聞くのが当たり前になっています。僕らが就職する頃はそんなことはあり得ませんでした。今は普通に男子が聞いてきます。

○発言者 9 大学の求人ときでもそういうのを出したりします。

○安藤 そうです、そうです。僕らは第一生命総合研究所と組んで、「父親が子育てしやすい企業ランキング」というのを出しています。それは就職ランキングと同じぐらいの価値になってきています。業績とか年収とかではなくて、ワーク・ライフ・バランスがしやすい企業にしたいというふうに思っています。

でも、そこが、やっぱり粘土層は、「なに、あいつら、若いくせにそんな楽をしようと考えているんだ」みたいな反応しかしない。「いや、そうではないです。ワーク・ライフ・バランスをすると生産性も上がって、業績も上がって、いい人材が育ってい

くんですよ」ということを、僕や渥美さんなんかは企業で言います。わかっている企業が少し増えてきた。

○発言者 9 もう 1 点だけいいですか。研究者というのは、そうは言っても、時間の都合がつく、自由にちょっとできるところがあります。それが逆に自分を責めるところになって、時間を割くことにものすごく抵抗があるというのがあります。そこはやっぱり個人の価値観で変えるべきでしょうね。

○安藤 時間を割くことに対して、研究が遅れてしまうという意味ですか。

○発言者 9 そうです。それはもう自覚ですかね。

○安藤 さっきも言ったように、どっちがということではないけれども、どっちもやはりベストを尽くすしかないのだろうなと思います。やったことも、やらなかったことも、最後はツケが回ってくる。結果が出てくると思います。

○発言者 10 今の「時間が自由になるので」ということに対してちょっとコメントをさせていただきたいのですが、今まさに現役なので、やっぱり子どもに時間を使って、自分の研究のペースとかが、独身のときに比べて半分以下に落ちている現状に、すごく罪悪感を感じていた時期があります。

今、山形大学にいますが、先日、郷道子先生が男女共同参画（国際シンポジウム）に来てくれて、ちょっと話をしてくれたときに、「あとで取り返せる」ということを最初に言われていて、今はちょっと無理だけれども、あとで頑張って、変な言い方ですが、社会に貢献するというか、（研究の発展に）貢献すればいいということが一つすごく励みになりました。

○安藤 よりどころになりましたね。

○発言者 10 そういうのを、先輩女性科学者が後継に伝えるという機会を、こうやって持っていただけるというのはいいのではないかと思います。

あと、「子育てしやすい大学ランキング」を調べてください。よろしく願います。

○安藤 それはどこと組めばいいのか。いいですね。

○発言者 11 育休をとることで、勤務先に迷惑をかけてしまうような気がします。

○安藤 なるほどそうですね、一般企業を見ていると、今、株価を伸ばしているユニクロとか、ベネッセとか、P&Gとか、ユニチャームとかを見ていると、やっぱり 40 代の女性の社員が、子育てを終えてまたフルタイム働けるようになって、ヒット商品をつくっているケースが多いですね。子育てが忙しい時期は、やっぱり時短とか育休を取ったりして、うまく自分の研究なり営業とかができなかったけれども、それが終わって、今恩返しをするみたいな感じになっていますね。

見ていると、90 年代の不景気のときに、そういった女性の両立を一生懸命やってき

た企業が今恩恵を受けています。会社はそのときに辞めさせなくてよかった。女性が主力で働く企業だからですが、男性の育児がこれだけ入ってきて、介護も入ってきますから、これからは男性もそういった家庭の問題を抱えながらもある程度働ける、辞めなくてもいいような仕組みをつくっておかないと、将来的には伸びていく企業にならないのではないかと僕は言っています。

おっしゃるように、今はできないけれども、あとで取り返しはつくと僕は思います。そういうことを社会が認めてあげるといえるか、容認するということが大事かなと思います。あとは個人の問題だと思います。

○司会 安藤さん、そろそろお時間ですね。これから東京に帰られるんですね。

○安藤 そうですね。東京に戻って保育園のお迎えに行かなければいけないので（笑い）、6時までに帰らなければいけないです。どうもありがとうございました。いろいろセミナーも各地でやっていますので、またプライベートの時間に来ていただければと思います。本当にどうもありがとうございました。（拍手）

○司会 長いあいだありがとうございました。

（終了）